

「問い」についての断想 2

～ WHY (なぜ) の前に How (どのように) を ～

生物学者の福岡伸一氏が、ノーベル文学賞受賞者のカズオ・イシグロ氏との対談で、「問い」について興味深い話を述べている。

なぜ私たちは存在するのか、なぜここにいるのか、なぜ生きているのか。われわれ科学者、とりわけ生物学者は、この「Why (なぜ)」に直接答えることができません。その代わりに、われわれはもう一つの問い「How (どのように)」を説明します。生物はどのように代謝するのか、癌はどのように始まるのか。これが科学の限界であり、同時に科学の力の源でもあるわけです。(「動的平衡ダイアログ」木楽社 刊)

氏は、この考えをもとに対談相手イシグロ氏の小説についても、「そこにある存在をありのまま受け入れる、つまり「How」を丁寧に記述しているようであり、終わりまで読むと、結果的に「Why」に対する答えが示される。」と、その感想を述べている。

「How (どのように)」への答えがあつて、初めて「Why (なぜ)」に答えることができる。福岡氏のこの言葉に、私は、ほかならぬ教育の場で、日々教師から子どもたちに向けて発せられている「問い」(発問)について考えてみることの必要を感じた。

「兵十は、なぜ、ばたりと火縄銃を取り落としたのか？」

「太一は、なぜ、クエを殺さなかったのか？」

「なぜ、あなたたちはけんかしたの?」「なぜ、君は遅刻したの?」「なぜ、・・・?」

等々。授業場面に限らず私たち教師は、学校生活のさまざまな場面で、さまざまな「なぜ?」を子どもたちに問いかけている。この問いなしには授業も生活指導も成立しないと言ってもいいほど、私たちは、おびただしい「なぜ?」を子どもたちに投げかけているのである。前回紹介した6年生の女の子たちの修学旅行でのめめごとの話の中でも、「なぜ?」という問いの持つ問題点について考えてみたが、今回は、授業場面を取り上げて、この問題をさらに考えてみたい。

物語の読みで、最も多く問われるのは、ある状況下での登場人物の気持ちや行動の理由であろう。その目的は読み手に文学体験させることにある。物語世界の登場人物の体験を、読み手にも共体験させるために、教師は人物の心情を想像させたり行動の理由を考えさせたりしようとする。しかし、大抵の場合、それらのことは叙述には直接的に書かれていない。書かれているのは、心情や理由を想像させる場面の状況であり、その中にある人物の様子(表情・行動・会話等)やその人物の目に見えている情景である。

例えば、ごんを撃った兵十が火縄銃をばたりと取り落とす場面前後の叙述は、次のようなものである。

ごんは、ばたりとたおれました。／ 兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、土間にくりが固めて置いてあるのが、目につきました。／ 「おや。」／ と、兵十はび

っくりして、ごんに目を落しました。／「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」／ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。／兵十は、火なわじゅうをばたりと取り落しました。青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。(光村図書教科書 4年下)

書かれているのは、ごんを撃った後の兵十の行動の様子、その目がとらえたごんの様子・表情・しぐさ、そして「おや。」から「ごん、おまいだったのか、・・・」へと変わる兵十のつぶやきである。なぜ、じゅうを取り落としたのか、その時何を思っていたのかは一切書かれていない。このような文章を前にして、教師が子どもたちに、「なぜ、兵十はじゅうを取り落としたのか？」と問うことは、果たして許されることなのであろうか。

もちろんその問いで教師が期待しているのは、この場面の状況を伝える文脈をふまえた想像であることは分かる。倒れたごんのそばへ「かけよって来た」兵十が、なぜか「うちの中」を見る。そして、土間に固めて置いてあるくりを見た後、「おや。」とびっくりして、倒れているごんに目を落とす。この文脈は、うちの中を見る前の兵十の胸にあったごんへの思いが、うちの中を見た後に揺れ動き、今までにない思いが彼の胸に湧いてきたことを想像させる。それを証拠づけるかのように、兵十のこれまでの疑問が一気に晴れたかのような言葉、「ごん、おまいだったのか、・・・」が続く。そして、その言葉を聞いたごんの「ぐったりと目をつぶったまま、うなずく」しぐさの後、兵十の「ばたりと取り落しました」という行動文が出てくるのである。

「なぜ取り落としたか」という「問い」の答えについては、へやの中を見た兵十の「おや」の後の思いと「おまいだったのか」と尋ねた時に見た「ごんのうなずき」を結び付けて、兵十がある真実に気付いたと考えるのが妥当であろう。しかし、その真実が何であったのかは、この文脈でははっきり決めることは不可能である。

兵十は、ごんのことについて何を知ったのか。「ばたりと取り落とす」ほどの重大事であることは確かである。「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」というつぶやきとごんのうなずきから分かるのは、おっかあが死んでから毎日くりやまったけを届けてくれていたのがごんであったということへの気づきであろう。しかし、ごんがなぜそんなことをしていたのかを知るためには、この文脈からだけでは無理がある。

一方、「ばたりと取り落しました」という、いかにも行為の重大性を感じさせるは表現は、くりの届け手がごんであったことへの気づきというだけでは、重大性の理由としてはどうもつりあわない。これまではいたずらばかりする「きつねめ」と思っていた相手である。たとえ、運んできていたのがごんであると分かっても、それぐらいで「じゅうを取り落とす」ことになるのだろうか。

この矛盾に折り合いをつけるには、前の5場面に遡り、兵十が加助に話す「おっかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれにくりやまったけなんかを毎日毎日くれるんだよ。」という言葉に着目するしかない。「おっかあの死後の暮らし」の中で、「毎日毎日」とどく「くりやまったけ」を見てきた兵十の思いが、瀕死のごんのうなずきを見た瞬間に蘇ってきたとしたら、兵十のごんへの思いは、届け手であったごんを撃ってしまったということへの気づきだけではなかつたろう。理由は分からなくても、兵十の意識は、その瞬間、そんな行為をしてきたごんの内面へも向き始めていたのかもしれない。

しかし、これらのことはどこまでいっても、読み手が想像する「物語的ストーリー」である。あまりにも哀れなごんの死をなんとか救いたいと思う読み手の思いの強さが、ここではかならず「感情のホメオスタシス」を生み出す。(前回紹介した千野帽子氏の言葉)つまり、読み手の前にあるのは、兵十とごんの関係性の変化を表す「How (どのように)」のみであり、兵十の行動の理由としての「Why(なぜ)」は、読み手一人一人が「How(どのように)をつなぎ合わせて想像するしかないものなのである。

つまり、ごんと兵十の関係に心を痛め続けてきて、救いようのない結末を前にした読者から出てくる「Why (なぜ、こんなことに?)」は、読み手が二人の関係性の変化を描く「How (どのように)」の答えを積み重ねていく過程で、それぞれが自らに向かって問わずにはおれなくなって問う問いなのであり、教師が、読み手である子どもたちの読みの状況と無縁なところから安易に問うべき問いではないということなのである。六場面でのごんに対する兵十の理解を、「くりの運び手=ごん」ということでごんが救われたと思える読み手は、それを「ばたりと取り落とした」行動の理由とするだろう。しかし、ごんへの一体化を強めてきた読み手の中には、それだけでは解決できない「Why (なぜ)」が残ってしまう人もいると思われる。

現実場面であろうと物語のような非日常的場面であろうと、子どもたちの体験しているのは、さまざまな「How (どのように)」で理解することの可能な世界である。その世界に浸り込むことからしか、その子にとっての「Why (なぜ)」は生まれてこないはずなのである。大人や教師の教育的配慮とやらで、子どもたちの周りに広がる豊かな「How (どのように)」の世界(大人たちには理解できていない)から、かれらを遠ざけてしまう身勝手な「Why (なぜ)」は、子どもたち自身の、その子独自の「Why (なぜ)」を壊し続けているのかもしれない。

(2018・12・16 川端建治)